

カナダ人は従来、国際的に映し出される自分たちのイメージによってカナダがいかなる国なのかを定義づけてきた。1950 年以来、そのイメージは平和維持とミドル・パワーに関連づけられてきた。カナダ人は、平和維持活動を通じた国際社会への貢献、開発援助の提供、国際法や人道的価値観の尊重を通じた国際コミュニティへの奉仕など、カナダの国際的な活動そのものがカナダのアイデンティティであると情熱的に信じてきた。カナダのアイデンティティといえば世界の平和維持者と頻繁に結び付けられる。

しかしながら政権交代が起こった 2006 年以降、保守政権はカナダ人のアイデンティティを明確に示す新しい神話として 1812 年戦争に着目した。1812 年戦争は、新しい国家のナレティブとして、カナダ史における同戦争の扱いを変えただけでなく、現在のカナダという国の起源の正当性を示す明瞭なシナリオを構築する。1812 年戦争によって、カナダは平和維持国家ではなく、むしろ紛争から誕生した国として位置付けられるのである。

興味深いことに、国内の政治アジェンダもこの新しいアイデンティティの再構成に作用している。保守政権は、自由党によって何十年も提供されてきたアイデンティティに対抗し、その再構成を可能とするスペースを作り出した。カナダのアイデンティティの再構成は常にある特定のコンテキスト、すなわち自由党に長らく関連付けられてきたカナダの国際主義への対抗である。

ショーランダー教授はまた、新しいアイデンティティの再構成はカナダ外交の特徴に以下の点で影響を及ぼすことを指摘した。第一に、1812 年戦争のナレティブはカナダの権威ある国際主義に、誠実だが潜在的に好戦的な国としてのイメージを与えるものである。カナダの外交政策は、保守支持者がリベラル国際主義と捉える穏やかな平和主義をもはや反映するものではない。第二に、カナダは紛争解決を仲介しようとする平和維持に関与しようとする姿勢をもはや持ち合わせていない。カナダはむしろ賢明に味方を選び共に戦う用意があるだろう。第三に、1812 年戦争は男性を主役とするものであり、ナレティブに女性は明らかに不在であることから、新しいレトリックは大いにジェンダー化されている。結論として、今日進む新しいカナダのアイデンティティ再構成と強化プロセスは、「鏡を通し」ているように思われる。同じように見えるが、逆向きなのである。